

モンテッソーリ教育思想の誕生(1)

近代化の中で翻弄される子どもを前に

早田 由美子

マリア・モンテッソーリ（一八七〇—一九五二）の教育思想と方法はその成立から一世紀近く経とうとしている。現在もなお影響をもち、多くの研究もある。かつてのユネスコの調査によれば世界で最も影響ある幼児教育とされた。しかし、影響が大きい分、批判も多くなされてきた。特に、モンテッソーリの知的教育に関して、早期知的教育として批判されている。

二十世紀の教育に大きな影響を与えたモンテッソーリの教育思想はどのように形成され、形成された当時のどのような意味をもっていたのであろうか。この連載では、十九世紀後半から二十世紀にかけてのイタリアにおけるどのような子どもと教育の状況の中でモンテッソーリが問題意識をもち、さらに、様々な学問によつて影響を受けながら、教育、特に、知的教育に関

する新しい概念を作り出し出していったのかを初期の思想を中心として考えていく。

まず、今回は、モンテッソーリの教育思想が十九世紀後半から二十世紀前半におけるどのような社会背景の中で生み出されたものであったかを考える。この時期に生じていた子どもと教育に関する諸問題に対してモンテッソーリがどのように捉えて、新しい教育をめざしたかを見ていく。

識字の時代と子どもの格差

先進的なイメージのするヨーロッパも十九世紀における識字率はかなり低く、一八五〇年頃、ヨーロッパ諸国の四十五パーセントから五十パーセントの人々が読むことができなかった。イタリアはヨーロッパ（ロシアを除く）でアルバニアに次いで非識字率が高く、国家統一直後の一八六一年における非識字率の全国平均は七十八パーセント（女性八十四パーセント、男性七十二パーセント）と四分の三以上の人が読み書きで

きない状態であった。ヨーロッパ諸国のほとんどが十九世紀後半に教会と国家との対立や階級的対立が渦巻く中で、普通教育を制度化したように、イタリアでも国家統一以後、普通教育制度が成立した。日本における明治維新の数年前のことである。その後、非識字率は一八七一年に七十三パーセント、一八八一年には六十七パーセントと少しずつ減少したものの、一九〇一年において五十六パーセントと二十世紀初頭の時点でまだ半数以上の人々が読み書きできなかった（一九一年には四十七パーセント）。

モンテッソーリが教育思想の土台を形成していくのは、普通教育制度が施行されて十数年を経て、社会が大きく変化していく時代であった。産業化や科学革命の進行により、人々は家業だけではなく、多様な職業機会を得ることになり、親から子への職業継



承の系譜が崩壊していく。生産の機能をもたず消費の機能だけになった家庭では、労働の技術と生活の知恵を親や地域の人々と労働し生活していく中で経験と口頭伝達という手段を通して教え学ぶという従来の教育のあり方は失われる。一方、学校教育で得た内容が生活の糧を得るための土台になったり、従来の職業の発展や新しい職業可能性を開いたり、経済的社会的地位向上のための手段となる時代へと移行しつつあった。

このようにこの時期は、共同体や家族が行っていた職業教育が学校教育へ徐々に移行する時期であり、それは、言いかえれば、知的教育の機会が度合いが、個人の経済的社会的地位を左右しうる時代が到来したと言える。まさにこの時期に普通教育が制度化され、就学率が徐々に上昇し、読み書きのできる人々が増えていく。

しかし、教育制度の成立がこれまでの差異を温存ないしは拡大する、あるいは、新たな差異化の要因になるという現象も生じていた。統一国家によって施行さ

れたカザーティ法という教育法は、理念的には近代公教育の基本的原則の内、無償と義務に加え、男女の就学の機会均等をヨーロッパ諸国の教育法の中で最も早い段階で打ち出していたが、実際には、学校の設置など教育に関わる諸経費の負担を国家ではなく市町村に委ねたため、財政力のない地域では、小学校初級課程の設置もできないことがしばしば起きた。さらに、二年間の上級小学校の設置義務は人口四〇〇〇人以上の市町村に限定されたので、その設置はより難しかった。つまり、貧しい地域や人口の少ない地域では多くの子どもたちが教育を受ける機会を得られなかったし、得られたとしてもそれを継続する機会は少なかった。

また、小学校設置の不平等は、法や制度によってもたらされただけでなく、上層階層が民衆教育を否定的に捉えていたことにもよっていた。彼等は民衆学校の設立や運営のために自分たちの出費が増大するのを嫌がったし、民衆が教育を受けて知的に向上すると、

反抗的になり、従順に働かなくなると恐れ、小学校設置に積極的ではなかったのである。

このような理由からも小学校設置は順調には行われず、イタリアは長く教育における地域格差に苦しむことになる。たとえば、非識字率の地域格差は一八七一年に四十一ポイント（ロンバルディア地方四十五パーセント、サルデーニャ地方八十六パーセント）であったが、全般的に識字率が少しずつ上昇した一九〇一年には、その差は四十九ポイントにむしろ拡大している（ロンバルディア地方二十二パーセント、シチリア地方七十一パーセント）。また、都市部と周辺部の地域格差も長い間残された。

また、教育の機会が女子にとつても不利なものであった。長い間、女性は教育、特に知育を受ける対象ではないと考えられており、女性の識字率は非常に低かったが、国家統一以前は男子の識字率も低いレベルにあったために男女格差は小さかった。しかし、近代的教育制度は女子教育に関する予算や学校数を男子よ

りも常に低く抑えたために、男女の格差が拡大するという現象が生じることになった（註1）。

このような不平等な教育制度は当時の人々の教育観を反映したものであった。逆に、制度によって人々の意識が左右されていく面もあるのだが、いずれにせよ、女子が就学すると男性に対して反抗したり、献身的につくさなくなるといふ懸念や女子の知的技術的能



「児童新聞」に掲載された市場で働く子ども（註2）

力の向上が男性の就職機会を奪うという怖れもあり、女子の知的教育の推進は阻まれた。

以上のように、イタリア南部の子どもや都市以外の田舎に住む子ども、そして、女子は学校で教える一つの知の世界から排除される割合が高かった。

さらに、都市に住んでいても就学できない多くの子どもが存在があった。この時期に増加した工場などで働く子どもや捨て子などである。産業化により、商品の大量生産が可能になり、物質的生活は向上するきざしを見せたが、その陰には子どもたちの工場労働の増加、就学機会の喪失、それによる非識字と貧困、栄養不良さらには病気や早死にといったさまざまな問題が生じていたのである。

当時の新聞が都市の下層階級の子どもの「悲惨と搾取と抑圧に沈んでいる」と評したように、この階層の子どもは産業化の進行の陰でその歪みをともに受けていた。このとき、教育を受け、読み書きを学び、専門的な知識を増やすことは、その悪循環を断ち切る武

器になるはずだったが、これらの子どもたちは学校制度から排除されることが多かったのである。当時、硫酸、黄鉱山や硫酸にブリキを浸ける工場など危険な場所や織維工場など健康を害する場所でも、子どもが長時間労働しており、それが各種新聞などでも大きな社会問題として指摘されるようになっていた。モンテッソーリはこの時期における下層の子どもたちの状況改善を、国際会議や婦人会議で訴えている（一八九九年六月）。

十九世紀は、児童労働とともに捨て子の世紀でもあった。捨て子の数が十九世紀半ばには十八世紀初期の数倍に激増し、その後各種の政策によって徐々に抑制されていったものの二十世紀初頭においてもまだまだかなり高い数字を示していた。捨て子の急増の原因には、人口の増加、近代型の貧困や産業化による農業労働力としての子どもたちの価値の低下、女性の就労形態の変化など、十九世紀前半から顕著になってきた社会的・経済的諸変化が基礎にある。さらに、母乳育児にこだわらず養育者を限定しないという慣習に加え、家族の

より良い生活をめざすために家族計画の一環として子捨てを合理化しようとする。心性の変化などもあったと考えられる。また、捨て子養育院等施設の整備による子どもに対する処遇の改善（市民層の子どもへの関心の高まり）など、捨て子の急増はこれらの心性の変化が社会的経済的要因に折り重なって生じたと考えられる。

養育院での待遇が改善されたとは言え、捨て子の多くは十分な教育を受けられることは少なかった。一年間に十万人を数えたと言われる捨て子は家族からその存在を受け入れられず、学校教育からはじき出され、過酷な児童労働によって搾取され、知の世界と出会うことは少なかった。

このようにみえてくると、モンテッソーリが教育思想を形成していく十九世紀末から二十世紀初頭にかけての時期は、近代的な知的教育が普及する一方で、教育を受ける側の格差が明確になった時代であった。また、その問題を問題として社会が徐々に認識しはじめ

ていた時代でもあった。

学校教育の実態

一方、就学機会を得られた子どもにとっても、豊かな知が保障されていたとは決して言えなかった。

当時の小学校で教えられた内容は男女とも極めて限られており、また、男女で教える内容が差別化されていた。イタリア語の読み書きと算数それに宗教が基本であり、それに加えて、男子には「市民の義務」が教えられた。男子師範学校では、国家主義を繁栄した軍事教練が加わっていたので、それを学んだ教師によって小学校で国家主義的規範も伝えられた。

女子には「女性の仕事」という科目があり、縫い物、編物、そして家庭における教育者としての役割が教えられた。十九世紀後半から「家庭における



教育者」としての母親という規範が広がり、さらに、それは十九世紀末には賢母 (saggia madre) という概念に強められていた。この規範が、これも十九世紀後半から増えつづけた小学校の女性教師によって女子に伝えられていった。女性教師が増加したのは、小学校教育を普及させるために安価に雇える存在としてその養成を行政が振興したためである。また、女性にとつても教師は、低いが安定した給与を確保できる数少ない職業として魅力があった。女子師範学校での教育内容も、読み書き算数と宗教、それに、裁縫を初めとする衣類の管理と家庭における教育者としての母親役割に限定され、そこで学んだ女性教師たちが子どもたちに伝えたことも限られた内容にとどまった。

学校の教育方法にも問題があった。十九世紀末には、「科学的教育学」の名の下で子どもの動きを制止するための学習机が発明された。子どもの手足の長さなどを測定し、体型に合わせた椅子と足台と机が組み合わされた学習机 (banco) が作られたのである。体

型に合わせたと言っても、座りやすい椅子を作るためではなく、子どもの自由な動きを止めることが目的であり、子どもはそれに座ると授業中絶対に立ち上げられなかった。

また、当時の教育現場では、賞罰という外からの圧力によって畏怖心や虚栄心を刺激して、子どもを学習に駆り立てるという方法もしばしば採られていた。このような教育のあり方では、逆に内なる知的好奇心は抑制された。

モンテッソーリは身動きができないようにした学習机や賞罰など外的な力によって子どもの活動を抑えつける教育を批判した。それだけではなく、イタリアにおける子どもと教育の諸問題、すなわち、非識字、児童労働、学校教育の条件や教育内容などの問題に加え、貧しい子どもが学校での不利などを問題視し、そこからすべての子どもを視野に入れた改革をする必要性を認識した。近代社会の到来に伴って生じた問題状況の中でそれを批判しかつ克服するために、そして「人類

の再生のために」新しい教育をめざそうとした。

それは、子どもの生命力を援助し発展させながら知性を伸ばそうとするものであった。その基本には、彼女が創設した「子どもの家」(一九〇七年)に通う幼児が喜びをもって知的作業に集中する姿を発見したことがあるのだが、社会的背景としては、以上のようないタリアにおける教育の問題が存在していたのである。(甲子園短期大学)

註

1 女性の非識字者の対男性比(対100)は、一八七一年において121であったのに、就学率が上昇した一九〇一年には130と格差が拡大した。

2 Corderia e A. Tedeschi, *Giornale dei fanciulli*, Treves Editori, 1898, No. 48.

参考文献

- 1 Giacomo Cives (a cura di), *La scuola italiana dall'Unità ai nostri giorni*, La Nuova Italia, Firenze, 1990. (「イタリア統一後の学校」)
- 2 Marco Guaz, *Allo frontiere dello stato*, Franco Angeli, Milano, 1988. (「国境を」)
- 3 C・M・チポッラ『読み書きの社会史』佐田玄治訳、お茶の水書房、一九八三年。
- 4 Simonetta Soldani (a cura di), *L'educazione delle donne*, Franco Angeli, Milano, 1989. (「女性の教育」)
- 5 Franco Cambi e Simonetta Ulivieri, *Storia dell'infanzia nell'Italia liberale*, La Nuova Italia, Firenze, 1988. (「イタリア統一後の子ども史」)
- 6 Volker Hunecke, *I trovarelli di Milano*, Il Mulino, Bologna, 1989. (「ミラノの捨て子」)

☆1' 2' 4' 5' 6' の日本語題名は拙訳による。